

2010年度 SCAN 発表論文

## 「釧路における

---

## 高卒就職希望者の抱える課題」

---

釧路公立大学経済学部

労働経済論演習 1 班

天野詩織

石田沙也加

佐々木綾

佐藤静佳

佐藤史隆

中本武志

長澤佑太

2010年12月

## 論文概要

---

今回私たちは「釧路における高卒就職希望者の抱える課題」というテーマを立て、調査を行ってきた。

私たちがこのテーマを選んだ背景には、釧路における高卒就職希望者の厳しい現状がある。釧路という地域は高卒での就職希望者が多い地域であるが、釧路管内の2009年度、高卒者就職内定率は78.9%で、これは全国的に見ても非常に厳しい状況である。しかしその厳しい状況下においても、高校によっては高い就職実績を維持している高校もある。

そこで今回のプレゼンでは、釧路市内の就職実績に差がみられる普通科高校2校に焦点を当て、両校の進路指導の比較を通し、就職実績の差はどこから生まれるのか、それを改善するためにはどのような取り組みが必要か、検討していく。

まず第一章では、釧路市内の高卒就職の現状について見ていく。おもに就職率や内定率など、統計面から、現状を考察していく。また今回のプレゼンテーションで、普通科高校の進路指導について着目した理由について説明を行う。

次に第二章では、実際に釧路市内の普通科高校二校の比較を行う。これは就職実績などデータ面と、進路指導の二つの面から比較し、両校の違いを考察していく。また明らかな違いが見られる取り組みについては、詳しく比較を行っていく。

最後に第三章では、これまでの両校での比較を通し、どのような進路指導を実践すればよいのか考察し、改善策を提言する。

先にプレゼンに入るにあたり、高校生と大学生の就職システムの違いについて説明する。大学生の場合、何社でも自分が望む企業を並行して受けることができ、グループディスカッションや、個人面接など何度かの面接を通して内定となる。

しかし高校生の場合は、一度の面接のみであり、また就職協定により「一人一社制」という仕組みの下で一つの企業を受けると、他の企業を受けられないという決まりがある。そのような違いがあるという前提で話を進めていく。

# 論文目次

---

## I 釧路における高卒就職の現状

- I-I 釧路における高卒就職の現状
- I-II 普通科高校に注目した理由

## II 釧路市内普通科2校の比較

- II-I 就職状況などデータ面からの比較
- II-II 進路指導を中心とした両校の取り組みの比較
  - II-II-I 資格取得学習
  - II-II-II インターンシップ
  - II-II-III 進路ノート
- II-III 高校と企業の関係

## III 改善策提言

就職対策の改善

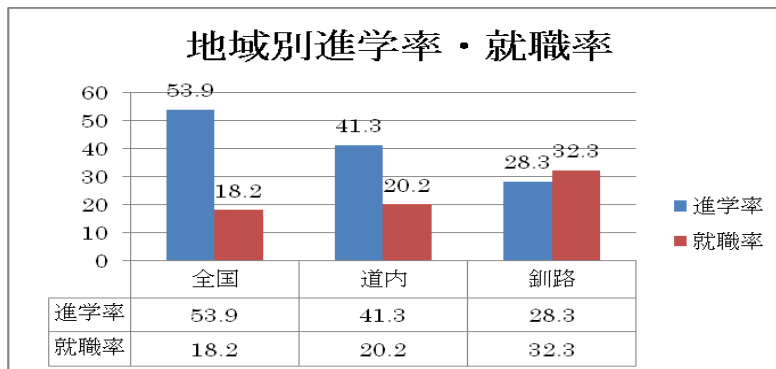
## 参考文献一覧

# I 釧路における高卒就職の現状

## I-I 釧路における高卒就職の現状

### ① 地域別進学率・就職率

<図表1 地域別進学率・就職率>

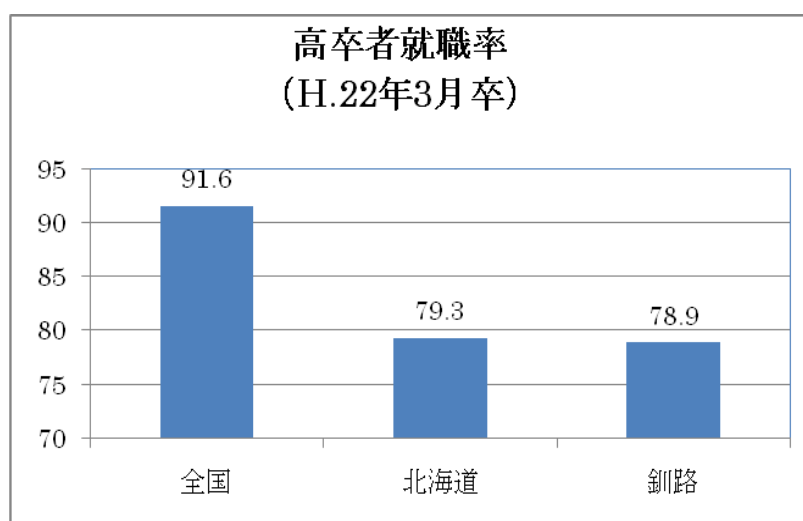


出典：・平成22年3月高等学校卒業者の就職状況に関する調査（文部科学省）  
・釧路公共職業安定所

この場合の進学率・就職率というのは、卒業生全体に占める進学者・就職者の割合を指す。このグラフを見ると、釧路では進学率が28.3%と全国・道内と比べて低いことが分かる。また就職率に関しては、32.3%と全国・道内と比べて非常に高いことがわかる。

### ② 高卒者就職内定率

<図表2：地域別高卒就職率>



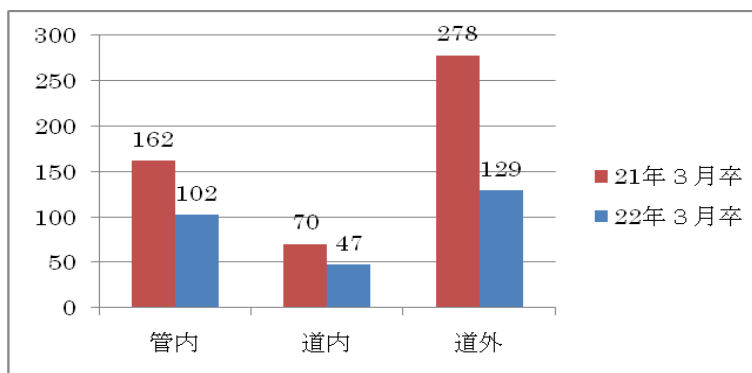
出典：・平成22年3月高等学校卒業者の就職状況に関する調査（文部科学省）  
・釧路公共職業安定所

上記の表は2009年度の地域別高卒者就職内定率である。これは就職希望者に占める就職内定率を表す。これを見ると釧路管内の2009年度高卒者就職内定率は、78.9%となっており、これは全国的にも非常に低く、また全道的に見ても低いことが分かる。

また、この2009年度の管内就職希望者数は507人、それに対し、就職内定者数は400人となっており、管内を希望する約100人近い生徒が、未決定でとなってしまう。

### ③ 求人数

<図表3：地域別求人概況（平成21年8月時点）単位：人数>

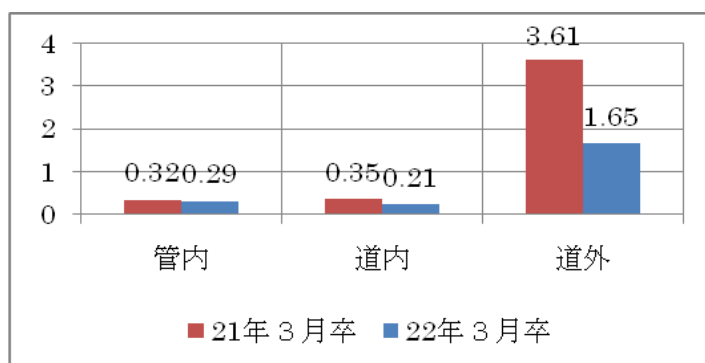


出典：釧路教育局

2009年度8月時点での求人数は全体で（管内+道内+道外）=278人となっている。これは前年同月510人と比べても、232人の減少となっている。

### ④ 求人倍率

<図表4：地域別求人倍率の概況（平成21年8月末 現在）単位：倍>



出典：釧路教育局

これは、対前年比で、管内0.03、道内0.14、道外1.96の低下となっている。また釧路管内全体での求人倍率（管内+道内+道外）は0.43倍で、対前年比0.22減となっている。これは、求人数278人に対して、652人が就職を希望している状況である。

以上のことから、特に管内、道内での就職は厳しいことが分かる。道外に関しては、

大幅に低下はしてるが、管内、道内に比べれば断然就職はしやすい状況にある。しかし、この厳しい状況化でも、道外志向を持つ高校生は非常に少ないのである。

### ⑤ 地域別就職希望状況

<図表5：現釧路管内高校3年生の地域別就職希望の状況>

就職希望状況 (H.23年3月卒)		
管内	494	60%
道内	257	32%
道外	67	8%
計	818	

出典：・進路指導・就職状況に関する調査（浅川和幸）

このグラフを見ると、全体の内6割が管内就職を希望していることが分かる。

また、道外希望者は全体の8%と非常に低く、逆に管内・道内の求人は限定されているにも関わらず、非常に高い状況にあることがわかる。

以上のように、釧路管内での就職状況は非常に厳しいことがわかる。特に管内、道内を希望する生徒にとっては、限られた枠を争うことになってしまっているといえるのである。その状況のなかでの管内の高卒就職希望者においては道外への志向を生徒の割合は非常に低いといえる。

しかし、釧路市内の高校全てが厳しい状況に置かれているわけというわけではない。高校によっては、高い就職率を維持している学校もある。よって、次の章以降では、実際に釧路市内の普通科高校について調査を行い、就職実績を上げている高校と、厳しい状況にある高校の「進路指導」を分析・比較し、そこからどのような取り組みが就職実績の向上につながっているか考察していく。

## I－II 普通科高校に着目した理由

次の章での進路指導の比較に入る前に、今回のプレゼンで普通科高校の進路指導に着目した理由について説明していく。主に2つの理由がある

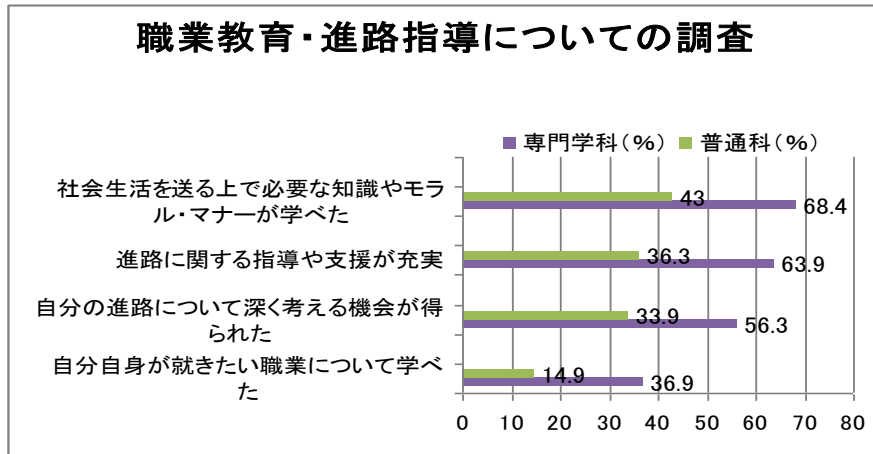
まず一つ目の理由としては、普通科高校は高等学校全体に占める割合が非常に高いことである。文部科学省「平成21年度学校基本調査」によると日本の高等学校では、普通科に在学する生徒数が平成19年5月時点で全体の約72%を占めており、逆にその他の職業に関連する学科で学んでいる生徒は、全体の4分の1程度と低い割合となっているのである。

また平成21年度では、普通科を卒業した者の数は全体で約77万人おり、そのうち大学・短大・専門学校へ進学した者の数は、約65万人、上位の教育段階に進学しない就職

者、また就職未決定者、一時的な就職についた者、左記以外の者) の数は約6万5千人となっている。

続いて二つ目の理由としては、「職業能力」形成の場としての役割を果たしているかという点である。

<図表6：職業教育・進路指導についての調査 >



出典：「若者の教育とキャリア形成に関する調査(2007年第一回調査報告書)」

中央調査社

この結果を見ると、両学科ともに、決して学校が「職業能力」形成の場としての役割を果たしているとはいえない状況である。またすべての項目において専門学科が普通学科を大幅に上回っていることが分かる。この結果から、相対的に専門学科では普通学科に比べて、①働くものすべてが身に着けておくべき労働に関する基本的な知識、②個々の職業分野に即した知識やスキル といった「職業的意義」の高い教育が行われていると考えられる。

逆に言えば、専門学科に比べ普通学科では、明確に「職業的意義」が低い教育となってしまっていると考えられる。これは、教育と仕事が結びついていない状態である。普通科を卒業する高卒者が、「職業的意義」ある教育をしっかりと受けずに社会に出ていることは大きな問題であるといえる。

このようなことから、普通学科の、「進路指導」に着目し、どのような進路指導を実践すれば、高卒者の「職業能力」の形成につながり、就職に結びつくか検討していく。

では、実際に釧路市内の二つの普通科高校に目を向け、どのような進路指導を実践し、どのような結果に結びついているか、検証していく。

## II 釧路市内普通科2校の比較

### II-I 就職状況などデータ面からの比較

ここでは、釧路市内の普通科高校 A 高校と B 高校のデータを比較していく。  
最初に近年の三年間の進路決定状況について比較する。平成 19 年～21 年の卒業生の進路決定状況は以下の通りである。

<図表 7：釧路市内普通科 2 校の進路状況>

	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年
<b>A 高校</b>			
進学決定者	178 人 (75%)	150 人 (63%)	180 人 (76%)
浪人など	3 人 (1%)	18 人 (8%)	13 人 (6%)
<b>就職決定者</b>	<b>51 人 (22%)</b>	<b>56 人 (24%)</b>	<b>39 人 (17%)</b>
<b>就職未決定者</b>	<b>5 人 (2%)</b>	<b>13 人 (5%)</b>	<b>3 人 (1%)</b>
<b>B 高校</b>			
進学決定者	94 人 (50%)	89 人 (48%)	90 人 (52%)
浪人など	20 人 (11%)	27 人 (14%)	11 人 (6%)
<b>就職決定者</b>	<b>49 人 (26%)</b>	<b>42 人 (22%)</b>	<b>44 人 (25%)</b>
<b>就職未決定者</b>	<b>25 人 (13%)</b>	<b>31 人 (16%)</b>	<b>30 人 (17%)</b>

出典：A 高校平成 22 年度『進路のしおり』・B 高校平成 22 年度進路指導計画より作成

<図表 8：A 高校と B 高校の就職希望者の比較>

	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年
<b>A 高校</b>			
就職決定者	90%	80%	90%
就職未決定者	10%	20%	10%
<b>B 高校</b>			
就職決定者	70%	60%	60%
就職未決定者	30%	40%	40%

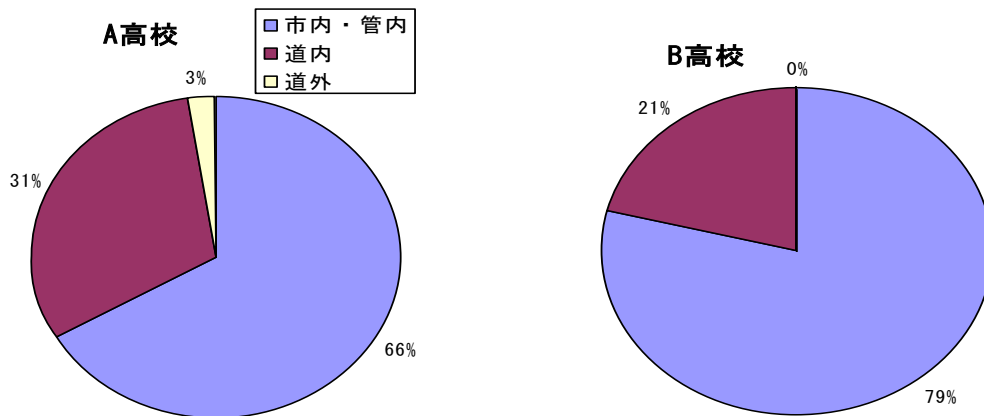
出典：A 高校平成 22 年度『進路のしおり』・B 高校平成 22 年度進路指導計画より作成

次に就職状況について平成 21 年卒業生の各高校の就職状況のデータをもとに就業地別、業種別、職種別、企業別の四つの側面から比較する。

① 就業地についてである。釧路市内の生徒だけではなく、道内の高校生は特に道内志向が強いことが一章であげられていたように、どちらも道内の割合が多い。特に B 高校では管内・市内の割合が約 80%ととても高くなっていることが分かる。



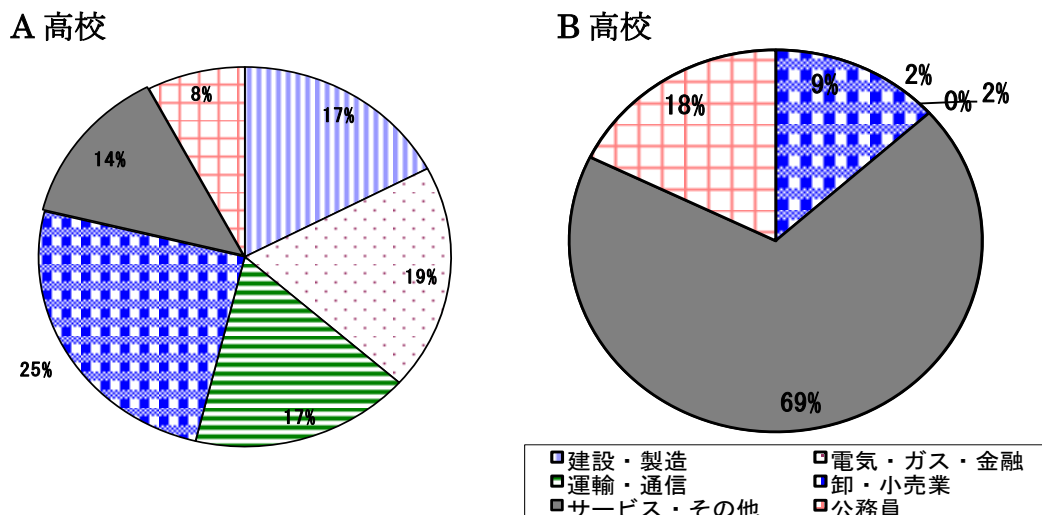
<図表9：A高校とB高校の就業地>



出典：A高校平成22年度『進路のしおり』・B高校平成22年度進路指導計画より作成

② 業種別の比較をする。A高校は、全体的にみると卸・小売業の割合が大きいですが、全体的にはそこまで偏りはない。一方でB高校は、特にサービス業・その他が多いことが分かる。サービス業は、不動産業、飲食店・宿泊業、医療・福祉、教育・学習支援・複合サービスなど多岐にわたる。特に医療関係がB高校は多かった。

<図表10：A高校とB高校の業種別>

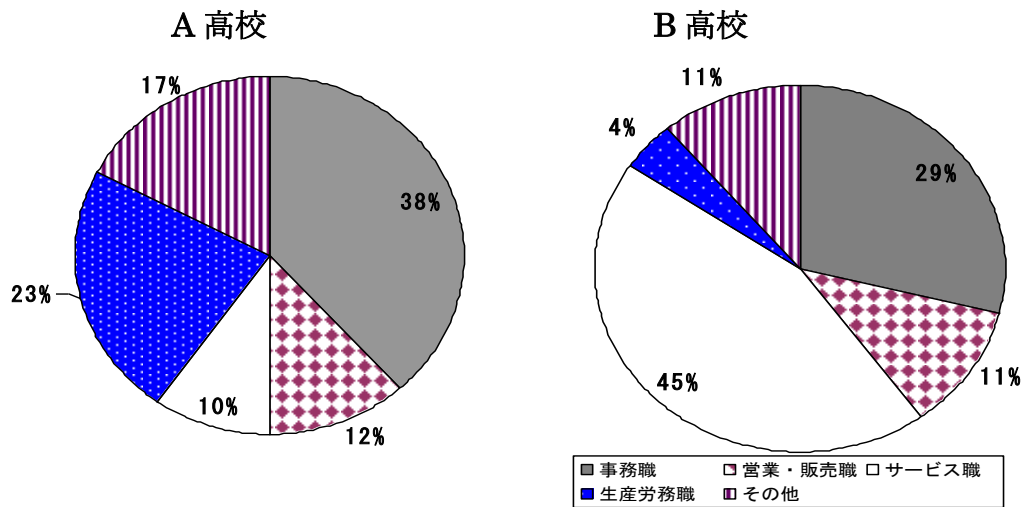


出典：A高校平成22年度『進路のしおり』・B高校平成22年度進路指導計画より作成

③ 職種別の比較を行う。A高校は女子の事務職希望が多いことが反映されている結果となり、事務職の割合が約40%となっている。B高校は業種別に引き続きこの職種別の比較

においてもサービス職が多いということが分かる。

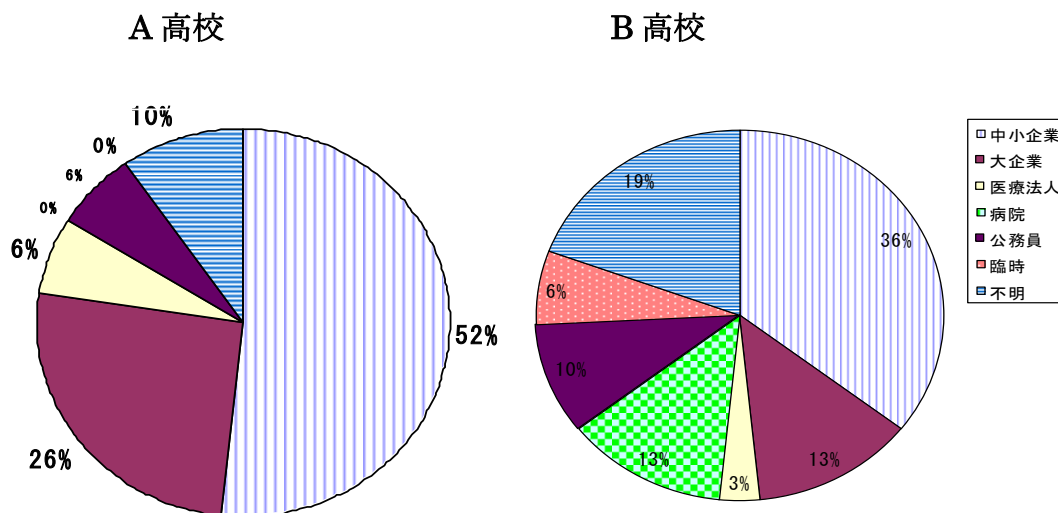
<図表11：A高校とB高校の職種別>



出典：A高校平成22年度『進路のしおり』・B高校平成22年度進路指導計画より作成

④ 企業別の比較をする。経済産業省の資料と統計を参考に企業の分類を行った。A高校は中小企業の割合次いで、大企業の大企業が分かる。

<図表12：A高校とB高校の企業別>



出典：A高校平成22年度『進路のしおり』・B高校平成22年度進路指導計画より作成

ここまでの比較で特徴的な点の一つ目は最初の比較で示したようにA高校に比べてB高校は、就職未決定者の割合が高いことである。二つ目は、B高校は職種・業種のどちらともサービス業・サービス職の割合が多いことであり。これは、釧路市内のデータで新規学卒

者を除いてのデータであるが、医療・福祉、サービス業の求人数が多いことが関連している可能性もある。

## II-II 進路指導を中心とした取り組みの比較

ここまでは就職状況のデータを比較してきたが、二校には就職決定者・未決定者において、明らかに差が見られることが分かった。次は進路指導の面から比較を行っていく。

進路指導の比較に入る前に、ここで、A 高校の二つの特徴について紹介する。一つ目は、平成 20 年度から導入されたフィールド制である。フィールド制とは、進路希望や興味関心に合わせて、自然科学・人文社会・看護医療・ビジネスの 4 つの中から自分にあったフィールドを選択し、進路実現に向けて系統的なキャリア教育を実践する制度である。就職希望者はビジネスクラスとなり、ビジネスクラスは、ビジネスに関する知識や教養を深めるとともに、資格取得を目指した科目を中心に学習する。

二つ目は、グリーン・プランニングである。A 高校では総合的な学習の時間を GP(グリーン・プランニング)と名づけ、3 年間を通して自分の将来について考え、主体的に学ぶ生徒の育成を目指す。GP では知識を先生から「教わる」「習う」というよりも、自ら「調べる」「まとめる」「考える」力を養うことを目指している。

それでは、二校の進路指導について1年生から比較していく。

A 高校で1年生において中心となっているのは、職業調べと職場体験学習である。フィールド制により1年生の夏休み明けに進路希望別に分かれる。職業調べでは、生徒が自らの進路に関する課題を設定し、PC で調査・研究した内容についてプレゼンテーションを行う。B 高校は、進路ノートと出前授業が中心的な取り組みとなっている。出前授業は職業を知ることが目的に専門学校の協力を得て職業体験を行っている。

2 年生において A 高校は小論文学習と面接礼法・マナー学習を行っており、就職試験に関わる、実践的な取り組みがされていると言える。B 高校は、2 年生の中心がインターンシップであり、進路別学習に入る前に進路希望別に分かれる。インターンシップについての詳しい説明は、のちほど行う。

3 年生では、A 高校も B 高校も実践的な指導が行われている。

以上の比較から分かるのは、A 高校はフィールド制によって進路が 1 年生の後期以降、明確になる。そして、2 年生からの指導内容が面接、マナー講座、小論文、履歴書など実践的な対策がとられていることが分かる。

一方で、B 高校は、1 年生では進路ノートに沿った取り組みに重点が置かれている。2 年生の後期に進路志望別に分かれ、そこから実践的な指導が行われていると考えられる。

また、インターンシップの時期が異なること、A 高校は1年生の職業調べでプレゼンテーションがあり、発表の場があるということも明らかになった。

<図表13：A高校とB高校のカリキュラム比較表>

	A 高校 (1 年)	時間数	B 高校 (1 年)	時間数
前期	ガイダンス ◆ 年間計画の説明、高校での学習について考えさせる	1	進路ノート A:新しいスタート B:進路探しを始めよう C:自分のことをもっと知ろう D:自分史を書いてみよう E:仕事研究をしよう①②	6
	自己理解 (進路学習ノートの使用)	1		
	フィールド選択 (自然科学、人文社会、看護医療、ビジネスの四つから選択)	2		
後期	職業調べ ◆課題設定→PCで調査・研究 ◆調査・研究内容を一人一人プレゼンテーションする ◆代表者が学年全体にプレゼンテーションを行う	6	進路ノート H:学問の研究をしよう K:社会について知ろう L:将来の進路について考えよう M:一年間を振り返ろう	4
	職業体験学習 (ビジネス) ◆ 事前指導 ◆ 職場体験 ◆ 事後指導	11	出前授業 (希望制で専門学校との協力を得て職業を知ることとした職業体験)	2
	進路ガイダンス (進路希望別に心構えや近年の傾向についての理解を深める)	1	進路全体指導 (三年生による進路講話)	1
	A 高校 (2 年)	時間数	B 高校 (2 年)	時間数
前期	ガイダンス ◆年間計画の説明と卒業生の進路決定状況の説明 ◆進路希望調査	1	資格取得学習 (資格ごとに分かれ学習する)	5
			職業調べ (インターネットの活用)	1
			進路適性検査 (DSCP)	1
			(夏休み) インターンシップ	三日間
後期	小論文学習 ◆事前指導 ◆小論文模試 ◆事後指導	6	進路全体指導 (面接練習)	1
			進路全体指導 (進路別講話)	1

	面接礼法・マナー学習 (説明や実践的な練習を行う)	1	進路別学習 (進路ノートの4つの項目)	5
	進路ガイダンス (進路希望別に心構えや近年の傾向についての理解を深める)	2	進路全体指導 (三年生による進路講話) (インターンシップ)	1 三日間
	A 高校 (3年)	時間数	B 高校 (3年)	時間数
前期	ガイダンス① ◆ 卒業生の進路状況の説明 ◆ 進路希望調査	1	進路別学習 面接、小論文対策 ◆面接練習は三段階 ①担任②学年団③進路指導の先生	8
	ガイダンス② (受験までの流れと手続き、進路規定などの説明)	1	進路全体指導 (学校推薦について)	1
	履歴書の書き方 (書き方を説明し、実際に記入、履歴書の書き方を学習)	2		
	模擬面接学習 ◆ 実践的な練習を行い、心構えや準備の学習 ◆ 面接ノートの作成 ◆ グループに分かれ面接練習	2		

出典：A高校平成22年度『進路のしおり』・B高校平成22年度進路指導計画より作成

進路指導の面から比較をしてきたが、その中で特に取り組みに違いの見える『資格取得学習』『インターンシップ』『進路ノート』について両校の違いを明らかにしていく。

## Ⅱ－Ⅱ－Ⅰ 資格取得学習

まず、資格取得に関する違いである。B高校の例であるが、12月時点で内定をもらっている現3年生の約52%が資格を3つ以上持っており、企業にとって資格を持っている、持っていない、の比重は高まりつつあるといえる。

<図表14：資格取得学習についての両校の比較>

A 高校	B 高校
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ビジネスフィールドでは、2年生の段階で、簿記のみ授業カリキュラムに含まれている（簿記3級・2級は必ず全員受験。それ以上の級については希望制。）</li> <li>・ 漢字能力検定、書写検定、英語技能検定、情報処理技能検定、電卓技能検定、ワープロ検定などを受験するよう生徒に薦めている</li> <li>・ 情報処理、電卓、ワープロにおいては対策授業も行っている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業カリキュラムの中に簿記、情報処理、文書デザインの選択制授業が含まれている（2・3年次）</li> <li>・ 総合的な学習の時間の中で、2年生の前期に『資格取得学習』の時間が5時間分設けられている(※)</li> </ul>

出典：A高校平成22年度『進路のしおり』・B高校平成22年度進路指導計画より作成

A高校では、就職者を対象としたビジネスフィールドのみで授業カリキュラムに簿記が含まれている。簿記3級、2級は全員受験させ、それ以外の級については希望制となっている。そのほか、漢字能力検定、書写検定、英語技能検定、情報処理技能検定、電卓技能検定、ワープロ検定などを生徒に受験するよう推奨している。情報処理、電卓、ワープロ検定においては対策授業も行われている。

B高校では、授業カリキュラムの中で簿記、情報処理、文書デザインの選択制の授業がある。しかし、試験の受験は強制ではないのだ。

それに加え、2年前期の総合的な学習の時間の中で資格取得学習の時間が5時間分設けられており、現3年生のみ、自分の興味のある資格別にクラスに分かれて授業を行っていた。クラスの種類は、漢字能力検定、英語技能検定、くしろ検定、危険物取扱者などである。しかし実際に受験する生徒は2割程度で、これも試験の受験は強制ではない。

なお、今年度は変更があり、現2年生の資格取得学習の時間は、ワープロ検定のみの授業しか行われていない。理由としては、先生の指導のし易さ、資格と取りやすさがあげられることであるのだ。

2校の資格取得に対するとりくみの比較は以上ようになっており、両校ともエクセルを含む情報処理技能検定を授業と連携して行っていることに対しては、生徒にとってその試験を受験しやすい環境づくりを作っており、良い取り組みと考えられる。

A高校では簿記の授業をとった人は必ず試験の受験をさせるなどの体制をとり、受験する生徒の割合が高く、資格取得に積極的といえるが、B高校では授業、そして総合的な学習の時間で資格取得の授業を行っているといっても、試験を受験するかどうかについては生徒に一任しているということが明らかになった。

## Ⅱ-Ⅱ-Ⅱ インターンシップ

インターンシップとは、学生等（大学院生、大学生、短期大学生、高等専門学校生、専修学校生（専門課程に在籍するもの））が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うことで、期間は2週間（実働10日）以上と定義されている。インターンシップの定義には高校生は含まれていない。しかし、多くの高校で職場体験が行われており、それらのことをインターンシップと呼んでいる。また期間についてはこの2校では、1～3日間のインターンシップが行われている。

<図表15：2校のインターンシップについて>

	A 高校	B 高校
時期	1年生の11月	・2年生の7・9・10・11月
参加者	・希望者制 ・ビジネスフィールドの1年生 45名	・希望者制 ・参加者は全学年で18名
期間	1日間	・B高校主催 3日間 ・釧路町主催 3日間 ・北海道看護協会釧路支部主催 1日間
目的	職業観の育成	職業観の育成
受け入れ先について	A高校と釧路市がそれぞれ受け入れ先を手配する	高校主催、釧路町主催、北海道看護協会釧路支部主催のものがある

出典：A高校平成22年度『進路のしおり』・B高校平成22年度進路指導計画より作成

まず時期についてA高校では1年生、B高校は2年生で行う。参加者はどちらも希望者を募るが、A高校ではビジネスフィールドの1年生45名が参加していて、ビジネスフィールドの1年生のほぼ全員が参加している。しかしB高校では、カリキュラム上では参加者は2年生となっているが、2年生の希望者が少ないため全学年から募集し、今年度は18名の生徒が参加している。期間については、A高校では1日間、B高校ではB高校主催のものと釧路町主催のものは3日間、北海道看護協会釧路支部主催のものは1日間である。インターンシップに行かせる目的は、どちらも職業観を育成することとしている。

インターンシップの受け入れ先については、A高校では、釧路市とA高校がそれぞれ受け入れ先の手配をする。釧路市は市役所・消防署・図書館・保育園を受け入れ先として手配し、A高校は民間企業の受け入れ先の手配をする。このとき民間企業のインターンシップの受け入れ先は、A高校の卒業生が就職しているところをお願いすることがある。A高

校の先生は、内定を出して頂いたお礼と卒業生の働いている様子を見るために、毎年6月に企業訪問を行っている。そこで本年度の求人情報を聞き、同時にインターンシップを受け入れてくれるよう要請する。B高校では、B高校が主催するインターンシップと、釧路町が主催する釧路町若者就労体験事業と、北海道看護協会釧路支部が主催する一日看護体験がある。

A高校では、内定を出してもらった企業に6月に先生方が訪問し、インターンシップの受け入れをお願いし、1年生がインターンシップに行き、3年生はその企業から内定を得るといった仕組みが出来ている。このことから、各企業とA高校のつながりが出来ていると言える。しかし、B高校ではインターンシップを終えた後、その企業に3年生が就職していないため、A高校と比較すると企業とのつながりが薄いと言える。

### II-II-III 進路ノート

両高校ともに進路ノートという教材を用いて進路指導が行われている。この進路ノートを行う目的としては、①生徒自身が将来やりたいことや「なりたい自分」を見つけるためのもの ②学科、コース、志望校、就職先など様々な観点から考えさせるものであるとされている。

では、実際に進路ノートがどのようなものか詳しく紹介する。この進路ノートの大きなテーマとなっているのは「自分探し」を行うということである。そのため「進路探しをはじめよう」という項目があり、将来どのような仕事をやりたいか、将来の進路につながりそうな趣味や興味、関心を持っているかなどの項目のもとでこれまでの自分を振りかえながら記入していくものとなっている。

また、「自分のことをもっと知ろう」という項目は、大学生が就職活動をするにあたり行う、自己分析に近いものであり、自分の性格や興味関心のあるものはどのようなものか知ろうということが行われている。よって生徒自身は、自己分析を行うことができ、自分の適性を見極め、進路を明確にするひとつの方法となっているのである。

このように進路ノートは自己分析をし、高校卒業後の進路を考えるという動機づけをすることができるという面を持っている。しかし、一方ではこのノートで行う作業は自分探しが中心になり、現実的な進路と結びついていないのではないかという面も見える。



## II-III 高校と企業の関係

前に述べたように A 高校では前年度の卒業生が就職した企業へ企業訪問する際にインターンシップ受け入れのお願いをしている。こうしたことから A 高校は就職先の企業とつながりがあることがわかった。私たちはそうした高校と企業とのつながりが、A 高校の就職決定に関係しているのではないかと考え、次にそうした高校－企業の関係が実際に就職決定に影響しているのか考えていく。

はじめに『実績関係』について説明していく。『実績関係』とは高校と企業との間の信頼に基づく継続的な関係である。付き合いの長い高校と企業の間では、高校は企業が望む生徒を送り出し、企業は高校から送られてくる生徒を採用するという信頼に基づく関係がきづかれるのだ。具体的には「この高校の生徒を毎年採用して真面目な子が多いから」といった企業の信頼や、また学校側にとっても、毎年採用してくれる企業であればどういった処遇か、どういった生徒がその企業に合うのか把握できるため進路指導がしやすいことが予想される。こうした理由から『実績関係』は高校生の就職において大切だと考えられる。

そこで私たちは A 高校と B 高校に『実績関係』はあるのか、また企業との関係に違いがあるのか調べた。今回私たちは各高校に『実績関係』があるかどうか調べるにあたり、『労働政策研究報告書』での、高校－企業間関係の分析に用いられた調査を参考にした。この調査では「過去との比較が可能であり、かつ継続性をはかるため 5 年以上の観察期間が得られるデータ」を用いて、高校－企業間関係の変化を分析している。しかし私たちは今回過去 5 年以上の各高校の資料を集めることはできなかった。だが過去 3 年分の資料を頂くことができたのでその資料から、継続して同じ企業が採用しているのかを調べどちらがより企業との関係が継続的であるかを考えていく。継続的に採用する企業の割合がおおきければ『実績関係』に近い関係があると言える。

使うのは各高校の平成 19 年度から平成 21 年度までの就職状況の資料で、内定先の企業のうち継続的に採用している企業はどのくらいの割合であるかを調べた。

ここでは 3 年間継続して採用のある企業を「実績企業」、3 年間のうち 2 回採用のあった企業を「継続採用企業」、3 年間のうち 1 回しか採用していない企業を「単発採用企業」と分類する。

<図表 1 6 : 実績関係に関する比較表>

実績企業	3 年継続して採用のある企業
継続採用企業	3 年間のうち 2 回採用があった企業
単発採用企業	3 年間のうち 1 回しか採用していない企業

出典：A 高校平成 22 年度『進路のしおり』・ B 高校平成 22 年度進路指導計画より作成

結果は以下の通りであった。A高校の実績企業が4社であるのに対し、B高校は2社であった。円グラフをみても、実績企業、継続採用企業の割合がA高校の方が高いことがわかる。しかしA高校の実績企業と継続企業の割合をみても全体の2割程度であることから、A高校は企業とのつながりがB高校よりはるかにあるが『実績関係』があるとは言えない。

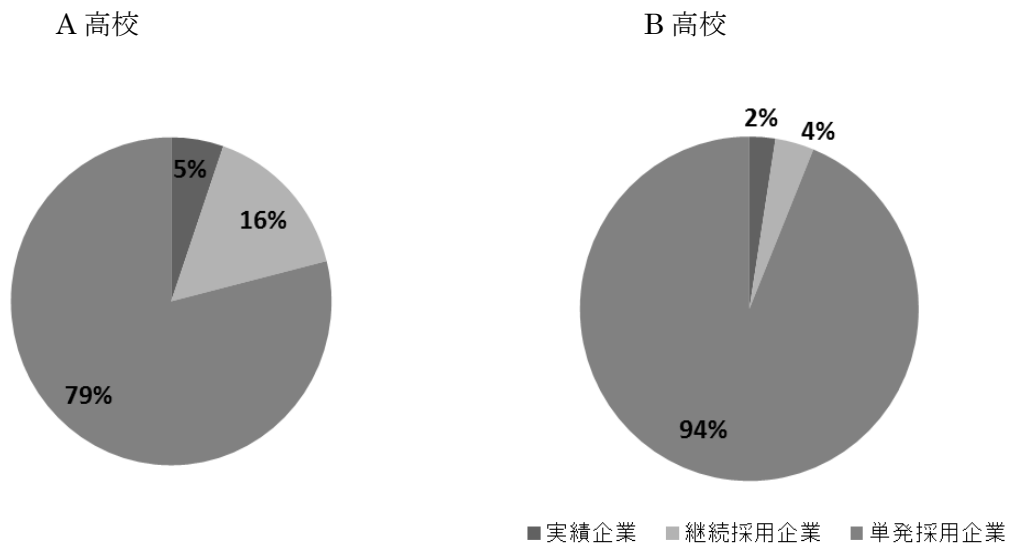
はじめに説明したようにA高校は就職状況がとても良い。このことから『実績関係』がA高校の就職状況の良い直接の要因ではないことがわかる。そこで私たちはA高校とB高校の進路指導に差があったことから、やはり高校生の就職において進路指導の内要が重要だと考えた。次の章では、今まで比較してきた進路指導の内容からB高校の改善策を考える。

<図表17：2校の実績関係に関する比較表①>

	A高校	B高校
実績企業	4社	2社
継続採用企業	12社	2社
単発採用企業	60社	76社

出典：A高校平成22年度『進路のしおり』・B高校平成22年度進路指導計画より作成

<図表18：2校の実績関係に関する比較表②>



出典：A高校平成22年度『進路のしおり』・B高校平成22年度進路指導計画より作成

### Ⅲ 改善策提言

#### 就職対策の改善

これまでA高校とB高校の進路指導の違いを見てきた。この調査を行うことで気付いた点は、A高校とB高校での進路指導の最大の違いは、「生徒が能動的に参加する学習が出来るか」ということである。ここでいう実践的な取り組みとは、主に生徒が実際に作業することから知識や技能を身につける進路指導のことであり、一例をあげると、面接指導、小論文、履歴書対策、ワークショップなどである。

よって、生徒が能動的に参加する学習を私たちはB高校のカリキュラムに取り入れることはできないかを考え、カリキュラム案を実際に考案してみることにした。

<図表19：B高校のカリキュラムの考案 >

B高校カリキュラム改善前

1年生	
前期	進路ノート
後期	進路ノート
	出前授業
	進路全体指導
2年生	
前期	資格取得学習
	職業調べ
	進路適性検査
	(夏休み)インターンシップ
後期	進路全体指導
	進路全体指導
	進路別学習(進路ノート)
	進路全体指導
	(インターンシップ)

B高校カリキュラム改善後

1年生	
前期	進路ノート
後期	進路ノート
	出前授業
	進路全体指導
2年生	
前期	実践的な進路指導 (小論文・履歴書対策など)
	進路適性検査
	(夏休み)インターンシップ
後期	進路全体指導
	進路全体指導
	進路別学習(進学：受験勉強、 就職：資格取得学習)
	(インターンシップ)

出典：B高校平成22年度進路指導計画より作成

改善策①はカリキュラムの変更である。2年生前期の資格取得学習と2年生後期での進路別学習の時間を入れ替えものである。こうすることにより1年生前期から行っている進路ノートを継続して使用することができ、職業人の話を聞こうという点や社会についてもっと知ろうなどの進路ノートの項目をより深く取り組むことができるといえる。

改善策②は、改善策①の発展で、進路決定に関するものである。B高校において1年生では1年間をかけて進路ノートや出前授業を行っている。よってこれらの学習から生徒は1年生のうちに卒業後の進路を明確にさせることに結び付けようというものである。その結果、B高校の就職希望の生徒は2年生の前期から小論文や履歴書の書き方などの就職対策に特化した授業を受けることになるといえるのだ。

改善策③はワークショップ方式の導入である。このワークショップ方式とはどのようなものかという点、一方的な知識や技能の伝達ではなく、参加者が自ら参加・体験し、グループの相互作用のなかでなにかを学び合ったりつくりだしたりする学習のことである。

では実際にどのような取り組みを行うかという点、例えば「働くこととは何か」などをテーマ設定し、そのうえで高校生同士がディスカッションを行う。そしてこの取り組みに大学生がチューターとして参加し、大学生は何かを指導するのではなく、高校生が自発的に取り組みを行えるような手助けを行う。そしてこの学習のまとめとしてグループで話し合った内容を発表するというのがワークショップ方式である。

この取り組みは、生徒にとってディスカッションや自分らで考えたことを自分の言葉で伝える発表の機会が得られることから、コミュニケーション能力の向上に結び付けることもできると考えられる。

最後に改善策のまとめである。これらの改善を行うことによって、次のことが成果として上げられる。

- ①受動的な形の進路指導ではなく、生徒が能動的に参加する形の学習が行える。
- ②2年生の前期から小論文や履歴書対策などを行うことで長期的な進路対策が行える。
- ③早い段階で進路を明確にすることで就職指導をより実践的に行える。

以上の改善策を実際に行うことが出来れば、B高校ではより良い進路指導を行うことにつながるのではないかとはいえる。

## 参考文献一覧

- ・ 本田由紀『教育の職業的意義』（ちくま新書、2009年）
- ・ 中野民夫『ワークショップー新しい学びと創造の場』（岩波書店、2001年）
- ・ 労働政策研究・研修機構『日本的高卒就職システムの変貌と模索』（労働政策研究報告書 NO. 97、2008年）
- ・ 経済産業省ホームページ  
(<http://www.meti.go.jp/>)
- ・ 総務省統計局ホームページ  
(<http://www.stat.go.jp/>)
- ・ 文部科学省 平成21年度『学校基本調査』  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k\\_detail/1288104.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1288104.htm))
- ・ 若者の教育とキャリア形成に関する調査(平成19年第一回調査)  
(<http://www.comp.tmu.ac.jp/>)
- ・ 釧路教育局 進路指導便り 第一号（平成21年10月16日発行）  
(<http://www.dokyoι.pref.hokkaido.lg.jp/hk/krk/>)
- ・ 北海道労働局  
(<http://www.hokkaido-labor.go.jp/4graph/index.html>)